

共通教育科目での「対話」の試み

——学生とともに『坊っちゃん』を読む——

村上林造

【要旨】

共通教育科目の授業では、特定の技能やスキル、あるいは態度や志向性の育成を直接的に志向するよりも、学生自身が自分の力で積極的に読み、書き、考えることを通じて、勉強への意欲と関心を喚起することを重視したい。そのためには、教師が一方的に知識や考え方を伝授する授業よりも、相互に対話を重ねる中で学生自身が考え、発言する対話型授業のほうが有効であろう。そこでは、学生達が積極的に発言する雰囲気が一一人一人に刺激を与え、逆に個人の積極的な思考と発言を促す、そういう教室をどう立ち上げるかが課題である。本稿では、一つのケーススタディとして、平成21年度後期の「漱石の思想Ⅱ」の授業で『坊っちゃん』を読解した授業を取り上げ、その展開を追跡したい。

授業で最初に問題になったのは、『坊っちゃん』において善人悪人の区別がつけられるかどうかであったが、作品の検討を通してその区別は容易につけ得ないことが認められた。しかし、不可知論に陥ることなくその状況に対処するには、どうあるべきかが問題となる。その中で「表面的な情報だけで物事を判断する恐ろしさ」が提起され、改めて自分自身と情報との関わりを見直そうとする方向に授業は展開した。また、うらなりの意味が問題になり、人間が言葉を自己正当化、自己弁護の道具として用いることが生き方をゆがめているのではないかとという論点が提起された。善悪の基準がないところで、正しい生き方を志向すれば、自らの責任で状況を見定め、安易な二者択一に頼ることなく、暫定的な判断を下そうとする意思と覚悟が必要になる。むしろ、人間にとって大切なのは、そういう姿勢を維持することではないかというのが一応の結論であった。

授業を通して、学生は終始活発に自分の意見を出席票に書いてくれた。それはおそらく、授業プリントで個人の意見を教室全体に紹介するという「討論」が一定の成果を挙げたということでもあろう。授業プリントを通じて学生間に新たな関心や問題意識が呼び起こされ、その中で次の論点が自然に形成されるといふ効果が見られたし、その中で学生達は試行錯誤しながら、自分一人ではなく、教室の皆とともに学んでいることに支えと励ましを見出していたと思う。プリントを通じて「対話」する授業は、共通教育科目における一つの有効な方法なのではないだろうか。

共通教育科目での「対話」の試み

——学生とともに『坊っちゃん』を読む——

村上林造

はじめに

大学の共通教育科目の授業でもっとも重視すべきことは何だろうか。もちろん、研究のための基礎知識を与えたり、一般的な学力としての思考力や論理力、表現力を育てること等、いずれも大切であろう。しかし、それらは教育の結果、事後的に身につくものであって、それを獲得するための直接的方法があるとは考えにくい。この点において、共通教育科目は、特定の知識や技能の獲得を重視する専門科目とは性格が異なるのである。そのようなどころから、共通教育科目では、特定の技能やスキルを直接的に志向するよりも、まず学生自身が自分の力で主体的に読み、書き、考えることを通して、勉強への意欲と関心を喚起することを重視すべきではないかというのが筆者の考えである。

また、共通教育科目が、大学に入学したばかりの新生向けの授業であることを思えば、彼らが大学に対して抱く期待感を裏切ることなく、勉強への意欲を高めていくことは喫緊の課題である。もちろん、ただ授業が面白ければ良いというのではない。大事なものは、授業の中で学生自身が能動的に読み、書き、考える姿勢を育てることであり、その結果として自ら考え、表現する力を身につけることである。

そのためにはやはり、教師が一方的に知識や考え方を伝授する授業よりも、相互に対話を重ねる中で学生自身が考え、発言する対話型の授業のほうが有効であろう。「対話」といっても、単に学生と教師との間に言葉のやりとりがあればよいというのではない。多くの学生が積極的に「発言」することで、教室の雰囲気各自に刺激を与え、より積極的な思考と発言を促す、そういう教室

をどう立ち上げるかが課題なのである。

本稿では、そのような問題意識の下に、一つのケーススタディとして、平成21年度後期の「漱石の思想Ⅱ」の授業について報告したい。15コマ全部を取り上げると論点を絞ることが難しくなるので、ここでは『坊っちゃん』を読解した4コマの授業（10月22日、29日、11月5日、12日）を取り上げ、そこで学生たちがどのようにこの小説を読み、議論が展開したかを報告し、併せて共通教育科目のあり方についても考えてみたいと思う。

一 初発感想の三類型―10／22の授業

『坊っちゃん』の授業に先立って、受講生全員に初発感想レポートを求めた。メールで送られてきた感想を読むと、だいたい次の三つに分類できるようである。

- ① 善人悪人に分かれた勧善懲悪小説として読むもの。
- ② むしろ善悪の区別が曖昧で分かりにくいとするもの。
- ③ 作品を通して自分のありようを振り返るもの。

10月22日の授業では、それらのレポートの中から代表的なものをプリントにして配布した^{注1}。

『坊っちゃん』を「勧善懲悪小説」と読む①のレポートでは、登場人物における善人悪人の区別は非常に明確

である。具体例を次に引く。

- 1 この小説に出てくる人物たちは、あくも現実味がある。赤シャツ（教頭）は文学士であり、喋り方にクセがある。また、権力に弱く、更にうらなり（古賀）から許嫁を奪いうらなりを左遷しようとしたり、讒言をするなど、いやらしい面がある。それに媚びる美術教師の野だいこ（吉川）は更にいやらしい。坊っちゃんからは「沢庵石をつけて海に沈めちまうほうが日本のためだ」とひどい言われようである。山嵐（堀田）は、教頭の讒言で坊っちゃんに嫌われ仲違いするが、最終的には坊っちゃんと共謀して「天誅」を野だいこと赤シャツに食らわせた。義理堅く良心的な面も持つ。うらなりは許嫁を赤シャツに盗られたうえに、延岡に左遷されるといふ憂き目に遭っている、人が良すぎるといふくらいいい人。性格の典型ともいえる人物が登場しているが決して現実離れしたのではなく、身近にいそうな人物だったり起りそうな物事だから共感できる場所があるのではないかと思う。

- 2 坊っちゃんは無鉄砲で後先考えずに行動してしまいがちだ。頭で深く考えることや、言葉で論理的に

相手に反論することは苦手であり、手が出てしまうこともある。しかし、なんでも暴力で解決というわけではなく、彼の考える正義に反することはしないようにしている。そこがただの乱暴者や近頃の「キレる」若者とは違ふところだ。彼の考える正義とは一言で言うと、自分に恥ずかしいことをしないことではないかと私は思う。他人にどう思われるかということではない。うまく立ち回って他人を陥れるようなことや、嘘をつくことなど、生きていく上で自分がやっていて恥ずかしくなるような、卑怯なふるまいをしないことである。これは口で言うほど簡単なことではないと思う。

3 うらなりは学校でも大人しく、滅多に笑う事も、余計な口をきく事も無い人物である。多くを語らず、常に低姿勢であるために、狸や赤シャツの犠牲となってしまう。それでも、坊ちゃんはうらなりを君子と呼び、常に坊ちゃんからうらなりへ関係を結ぼうと働きかけている。坊ちゃんにとって、うらなりは理屈ではなくただ気になって仕方がない存在なのである。それは、坊ちゃんにも他の登場人物にもない「大人しさ」と共に《謙虚》な性質が大きく関わっているのだろう。君子とは人格者であり、それは山

嵐のように強く理想を持つが故に力に走る者でもなく、無論お金や体裁や権力の側に立つ狸や赤シャツや野だでもなく、ただ静かに《謙虚》に生きているうらなりであるという部分に何かメッセージを感じるのである。

これらのレポートでは、赤シャツや野だいこは悪人であるのに対して、坊つちゃんや山嵐、うらなり等は善人であり、両者の区別は極めて明確である。またそのほかに、清が坊つちゃんに注ぐ無償の愛の穢れなさ、高潔さに注目する感想も少なくない。これらはいずれも、作品への率直な感想としては非常によく分かるのである。

だが、果たしてこの小説の登場人物はそれほど明確に善悪に分けられるのかどうか、その点に疑問を呈する感想もかなりある。例えば次のようなものである。

4 この小説は、表面的には主人公坊つちゃんが縦社会にはびこる悪を切り捨てる痛快ヒーローものであるようにも受け取れる。しかし実際は、人間の正義や信頼は決して定まったものではなく、時と場合、考える人によつて大きく揺れ動くものである。人の本質は深く複雑なものであり、他人が計り知ることには決してできないものである。だからこそ世を渡つて行くことは難しいし、正解がないからこそ面白い。

そのようなことを暗に示した作品が、「坊っちゃん」なのではないか。

5 結局のところ生徒たちを使って主人公にちよっかいを出したのは誰だったのでしょうか？なんだかとても気味の悪く、後味の悪い感じで、とても自分の中で消化しきれなかった事柄としてもものすごく引つかかっています。なぜそんなにも引つかかっているかというところを匂わせ疑惑を持たせてきたのにもかわらず、最後の最後までその大事な答えを明かさないうちにおかしいと思うからであり、なかなか味なまねをしてくれるなど感心もしたためであります。しかし、自分にとつては少し不愉快でもあるし、残念でもありました。(略)

この小説の一番怖いと思つたところは赤シャツや野だがやつたと思われていることのほとんどに確証がないということであります。もしかしたら堀田がしでかしたことがあるかもしれないし、読んだだけでは判別できない部分が多すぎました。ゆえに読み手の我々も手探りというか、小説の中の主人公と同じくらいの情報しか与えられていなかったのだらうといった意味で主人公と一緒に疑似体験ができたのだなと思ひました。そこが今回新鮮でもっとも面白い

ところだと思ひました。

これらのレポートによれば、『坊っちゃん』は勧善懲悪どころか、誰が善人で誰が悪人かの区別さえつけられないのである。そして、確かに『坊っちゃん』にはそういうところがある。例えば、バッタ事件について、赤シャツと野だはその黒幕が山嵐であることを暗に坊っちゃんに仄めかし、それを信じた坊っちゃんは山嵐を疑うようになる。その経緯からしても、確かに赤シャツが怪しいのだが、その明確な証拠があるわけではない。また、坊っちゃんも山嵐が辞職するに至る直接の原因は、彼らが中学校と師範学校の喧嘩を扇動したという弾劾記事が新聞に出たことだが、新聞社はどこからこの情報を得たのか。事件後の流れを見れば、それが赤シャツからである可能性は高いが、やはり真相は藪の中である。また、赤シャツが芸者と一緒に角屋に泊まつた事実をつかもうと、山嵐と坊っちゃんは向かいの升屋の二階に泊まりこんで見張りをするが、結局これも証拠はつかめないままである。この小説では何が真相か分からないというのは、そのとおりなのである。

読者に客観的事実がつかめないのは、できごとがすべて坊っちゃんの中から描かれるという視点構造が大きく関わっている。だが、考えてみれば、人は誰しも現実生

活においてそのような形で現実来接するほかないともいえる。我々は、自分自身の身に起こったわずかな直接体験を除けば、身辺で聞く不確かな噂話と、自分では確かめようもないマスコミ報道に基づいて「知ったつもり」になる以外にないからである。そういうえば、作中でも、坊ちゃんと山嵐を弾劾する新聞記事は全く無根拠で、事実に反するものであった^(注2)。それは、不確かな伝聞とマスコミ報道に基づいて現実を把握した気になっている我々の認識の脆弱さと無根拠性を改めて浮き彫りにする。そのような意味から、善人悪人は決定不可能だとする不可知論的な見方は、この小説において簡単に否定できないリアリティをもっているのである。

このように、『坊っちゃん』の感想は、①人間を明快に善悪に振り分ける見方と、逆に②人間の善悪は分けられないとする見方が対立しており、そこに作品読解の出発点があることは確かであろう。だが、それらとは別の第三の見方として、読者である自分自身のありようを振り返ろうとするレポートがある。次に二点引く。

6 私はどこか後ろめたさに苛まれつつ生きている

「坊っちゃん」を読んで、私が印象に残ったのは主人公の痛快な人柄である。愚かしいほど素直、金銭的な固執もなく、己の正しいと思つたことを徹底

的に貫く。世界で最も大切なことは己を貶めることなく常に公正であり続けることだというような。(略) 自分には彼と同じ行為は出来ない。面白くない話で笑い、嫌いな人間に微笑みかけ、心にもないことを口にする。おそらく私はこの主人公が最も嫌うであろうことを日常のように繰り返している。ほんの一時の住みやすさを求めるがために自らの尊厳を貶めて泥を被るときもある。この「坊っちゃん」では主人公の周りに俗悪な人間が多数存在するが、その基準でいけば紛れもなく私はその俗悪な人間である。世の中を生きてきて、「どうしてだ」と思うことはたくさんある。納得がいかないことも、不条理だと思ふこともたくさんある。しかしいつからか、私は世の中そういうものとして諦めるようになった。(略) 社会を上手く生き抜くためには自分という存在を極力殺した方がいい。社会の中に埋没し、社会と一体化すれば誰も自分の敵には成り得ない。それはどれほど楽な生き方だろうか。この上なく楽である。しかし楽であるということが楽しいとは限らない。どこか後ろめたさに苛まれつつ、私は生きている。夜、家で考え続けて眠れなくなつたときもある。だがそういうときでさえ「あれは仕方な

「かつたのだ」と自分を慰めるのだ。私は自分自身のそういう醜悪な部分を自覚していた。そして恐れていた。だからこの主人公が酷く眩しくて懂れた。愚直と笑われようと、己に恥じない生き方を私はしたかった。

自分の「醜悪な部分」を直視するまなざしがヒシヒシと伝わり、読む者に強い印象を与えるレポートである。共通教育科目での作品読解においては、読者としての切実な生活実感を作品理解の中に織り込み、自分自身を改めて見直そうとする態度を重視したいと考える。それは、専門課程での作品解釈が、先行研究を踏まえた論理的かつ独創的な把握を求めるのとはおのずから異なる要求なのだが、あえて言えば、専門課程においてもそれを軽視してはならないのではないか。どれほど専門的な作品分析であっても、その根元にあるものが読者の体験に裏打ちされた人間観である点は同じだからである。

7 言葉によっては伝えられないものを感じる

私は小学校の頃はよく笑い、明るい性格だと言われていた。しかし中学に入ってから上手く人間関係を築くことができなくなつて、地味で目立たず大人しい人間になつていった。その頃はよく同級生を

怖いと思つていた。(略) 休み時間になると、多くの女子は意味もなくトイレに押し寄せて、教室では言えないようなことをおおつびろげに話していた。私はそんな中に入つていくのが恐ろしくて、よく隣の棟のトイレまで行つていくのを思い出す。ただただ人間が怖いという感じだった。今でも気の強い人に接すると体が萎縮し、一瞬のうちに壁を作つている自分を感じる。地味で大人しいことがマイナスの評価でしかないこと、そしてそのことによつて周りの人から見下げられているという感覚を、中学高校を通してずっと感じ続けていた。(今でもその感覚は自分を苦しめる時がある)(略)

日本人はアメリカ人に比べ自分の意見を言うのが苦手であり、意見を述べられても恥ずかしかつて上手く答えることが出来ない、しかし今からの国際社会では、自分の考えを積極的に相手にぶつけていく能力がなくては生き残つて行くことができないというところが教育界で盛んに言われ、私も学校で国語の時間などにディベートをやらされたことがある。しかし、私は小学校の頃から上手くこういうものに馴染むことができなかつた。一つあるいは三つのグループに分かれ、対立するグループの発言の中から

弱みを見つけ、その弱みに反論する形で自分たちの考えの正当性を主張し相手を論破していく。授業が終わった後に、そういうものの繰り返しの中から自分が得たものは何だったのだろうかと思うと空しくなることがあった。自分の意見によって相手の口を塞ぎ、何も言い返せないようにさせたときの勝ち誇ったような顔、私はそういうものが本当に嫌いだった。『坊っちゃん』では、バッタ事件の後の職員会議の様子にそういうものを窺わせる。赤シャツや山嵐は、言論によって相手を論破していくという術を備えた人間である。それに対して坊っちゃん、意見を言おうとすると、「私は徹頭徹尾反対です…そんな頓珍漢な、処分は大嫌いです」という子供じみた発言しかできないのである。要するに、彼は言葉によって相手を押しつけ勝ち上がっていくような能力をもともと欠いた人間であり、実際的な処世術を全く持っていないという点でうらなりと重なるものがある。増給を断る場面で坊っちゃんが、論理的にどれ程赤シャツが正しかろうが、自分の心はそんなもので動いたりしないと心の中で言っているように、彼は赤シャツに備わった実際的な能力には感心しながらも、その持つ汚い側面をいやと言う

ほど見せつけられ、人間にとって本当に大切なものはもつと違うところにあるのではないかと感じている。それは赤シャツにはとうてい伝えることが出来ないものであり、相手を論破するという仕方では伝えられない種類のものであるということが分かっていたから、同じ土俵で言い争うようなこともせず「僕は増給がいやになった」という理由にもならない理由で去ったのであろう。

言葉で相手を論破することを過大に重視する考え方に疑問を投げかけ、「人間にとつてもつと大切なものは別にあるのではないか」と述べるこのレポートも、これまでの人生経験の中で抱え込んだ自分の実感を踏まえて、作品に分け入ろうとする姿勢を示している。確かに、読者は小説と対峙することによって、改めて「人間が生きているとはどういうことなのか」「人間にとって本当に大切なものは何か」という問いに直面させられるのであって、ここに、人間が文学とかかわる上で最も基本的なポイントがあるといえる。その意味で、6、7は人が小説と向かい合う上での原点を踏まえたレポートと感じられるのである。

この日の授業では、学生の初発感想レポートを三つに分類し、紹介した。そこで私がコメントしたのは、1、

3は初読の感想としてよく理解できること、4、5も作品に即してみればそのとおりであること、6、7に見られる姿勢は人が作品に向かい合う原点ともいえるべき大切なものであること等である。この日の授業から学生達がどんな感想を持ったか、それは、次の時間(10/29)の授業プリントを通して検討することになる。

二 『坊っちゃん』の人物を善悪で分けられるか — 10/29の授業

この時間の授業プリントによると、善人と悪人は明確に分けられないという感想は確かに前回よりも増えている。だが、他方ではやはりその区別にこだわり続ける者もいる。これら両者の関係をどう整理し、展開していくかがこの時間の課題である。

授業ではまず、登場人物について、善人と悪人は分けられないとする感想をとりあげた。

8 『坊っちゃん』を読んだ時は、坊っちゃんと山嵐が善人、赤シャツと野だは悪人と無意識に分けてしまっていたが、山嵐が本当に善人なのかという説に心の中でうなづいた。結局、善人、悪人とは何なのだろう。もしかしたらそれははっきり分けられるもの

ではないのかもしれないと今は思う。私は坊っちゃんの見点から読んだために、赤シャツや野だは悪人のように思ったが、彼らの見点から見たら、坊っちゃんは社会の流れに従わず、乱暴者の悪人なのかもしれない。善人、悪人が見る人の価値観によって変わってしまうものなら、そこを絶対的に分ける基準などないのではないか。

確かに、この作品で赤シャツや野だが悪人に見えるのは、坊っちゃんの見点からすべてが見られているからであり、それを離れて客観的に読むと、赤シャツを悪者とする明確な根拠は発見できないのである。『坊っちゃん』では善悪の区別は不可能とする見方はここに根ざしているわけだ。

それに対して、やはり善人と悪人は分けられるという意見もある。

9 わたしは『坊っちゃん』は善人悪人にはっきり分かれると思っている。それは作者である漱石がそのように意図して書いているように思う。読者は理屈抜きで好き嫌いの人を判断する坊っちゃんに同化して読んでいく。だからこそ、坊っちゃんが好きな人は善人、嫌いな人は悪人という構造で話を読み進めるのである。こういう点で、この善人悪人という線

引きには多くの人が納得するだろう。

この小説では「善人悪人にはつきり分かれる」というのだが、その根拠は、読者が坊っちゃんが好き嫌いによる善人悪人の区別に「同化」することだという。確かに、坊っちゃんは「理屈抜きで好き嫌いで人を判断する」のであり、現実においても、「善悪の判断」が実は「好き嫌い」の言い換えにすぎないという場合は少なくない。だが、好き嫌いとは善悪の区別が同じだということであれば、それは善悪を分ける基準がないということになるのではないか。

また、次のような意見もある。

10 客観的、普遍的に善人悪人というものが存在するとは思えません。ケース・バイ・ケースで善になったり、悪になったり、めまぐるしく変化すると思います。しかし、その上で私は『坊っちゃん』は善人悪人がはつきり分かれている作品と考えます。そう考える第一の理由は、赤シャツの存在です。先程、ケース・バイ・ケースと述べたように、これは立ち位置の問題であると思います。赤シャツの利益に便乗するような野だいこにとつては、赤シャツは善人になりうるかもしれない。しかし私はどうしても赤シャツを許せません。(略)言葉で人をやつつけ、

相手を踏みつけにするような人を、私はどうしても善人とは思えません。彼らと何らかの関係を結びたいとは決して思えないのです。私はそんな立ち位置にあるのです。

これもまた、善人悪人の区別は「ケース・バイ・ケース」であって、絶対的な善悪の基準はないという。そして、その上で判断基準を求めるとすれば、それは自分の「立ち位置」つまり主観的価値観であるというのであるから、これは基本的には9と同じ考えなのである。だが、このように見れば、8の意見と9、10の意見は、一見善悪を分ける絶対的基準があるか否かを巡る対立であるように見えて、実のところは両者ともにその基準がない事を認めており、そこには違いはないことになろう。

だとすれば、登場人物の善悪の区別をめぐる対立は、「善悪の区別は分らない」とする側が「勝った」ことになるのか。必ずしもそう考える必要はあるまい。議論において「勝ち負け」に重きをおくと、それによって問題が固定化されてしまい、より大きな視野から問題を捉えて、次への展望を開くことが難しくなるからである。それ故、授業では学生の意見を紹介するだけで、それ以上のコメントは控えたのであった。

だが同時に、その時点の私には、これら二つの意見の

関係がよくつかめていなかったことも事実である。今改めて考えてみれば、両者の関係はどう理解されるだろうか。それは、不可知論を結論としてそこに落ち着こうとする者と、そこを出発点としてさらに善悪の区別を求めようとする者の違いであろうし、また、客観的論理の次元で問題を扱おうとする者と、自分の主観的心情にこだわる者の違いともいえる。特に10は自分の「立ち位置」を積極的に押し出し、それに照らして「言葉で人をやつつけ、相手を踏みつけにするような人」を激しく批判するのである。また、善悪の区別は不可能だという不可知論の見方は、抽象的な理屈としては理解できても、果たして生身の人間がそれに耐えられるかという問題もあろう。例えば、自分が利害対立の外にある時は不可知論でよくても、利害対立の当事者となり、被害者の位置に立たされたときに、不可知論で落ち着いているわけにはゆくまい。その意味では、8が第三者的な見方であるのに対し、9、10は当事者的な見方であるともいえる。

だが、善悪の区別はつけ得ないことを認めつつ、自分の感覚とその奥にある倫理感覚にこだわり、そのことを通じて善悪の区別を求めようとする9、10の見方は、大きなジレンマを抱え込まないではないだろうか。例えば、坊っちゃんや山嵐は、作品結末で、「悪事」の証拠をつ

かまないまま、赤シャツに「天誅」を下す。「これは乱暴だ、狼藉である。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」と叫ぶ赤シャツに対し、山嵐は「無法でたくさんだ」と言つて「ばかりと撲ぐる」のである。だが、いかに善悪の区別が困難だからとは言え、言葉で「理非を弁じ」る努力を放棄して「天誅」を是認する行き方は、やはり問題だろう。それが、過去にどんな災禍をもたらしたかを我々は知っているのである。しかし、そうだとすれば、この場での山嵐の行動をどう評価するかは重い課題となろう。不可知論者はこの課題に無縁だが、坊っちゃんや山嵐を善の立場に置こうとする者は、ここできわめて難しい問題に直面させられる。少なくとも、これは「どんな時でも暴力はいけない」とか「場合によれば暴力も時には容認される」とかの一般論から択一的に答えが選べるような問題ではない。ここで山嵐は赤シャツに対してどう行動すべきだったのか、どういう態度をとり得る可能性があったのかを、状況に即して具体的に検討する必要があるし、その中で人は実に面倒な問題に向かい合わざるを得ないだろう。しかし、そもそも人が主体的に問題に向かい合うとは、そういう面倒さを回避せずに引き受けることであり、ここで問題を一般原則に解消してしまつては、自ら主体的に考えたことにならない

であろう。以上は、現時点での私の理解を述べたものであつて、授業においては、極めて断片的にしかそれに触れ得なかつたのであつた。

また、この日の授業プリントには「表面的な情報だけで物事を判断する恐ろしさ」という復習メール^(註)が掲載された。これは、善悪の判断が困難なところで人はどう行動すればよいかに直接つながる問題であるだけに、多くの学生達の注目を集め、この後の授業の方向にも影響を与えていくことになる。それは次のような文章であつた。

11 表面的な情報だけで物事を判断する恐ろしさ

『坊っちゃん』レポートの(2)「言葉によつては伝えられないものを感じる」を読んで、共感し、また言葉の限界も感じた。物事や人間性を判断するにあつて、私たちはまずはどうしても表層的なものに頼るしかない。言葉や態度もそれにあたる。一般的に、それらは人間性があらわれると考えられている。小説などでも、その人物の深いところまで触れられていない限り、描かれている言動など限られた情報の中でどんな人間なのかを考える。この事例に当てはまるか自信はないが、人間は簡単で分かりやすいことを好む習性があると心理学の授業で習つ

た。私たちはどうも今までの経験やメディアなどの影響により、こういうことをする奴はロクでもないと思ひこみがちである。恐らく、そのほうが簡単だからではないだろうか。ところが、私たちが認識する言葉や態度がどこまでその発信者を的確に表しているかは分からない。坊ちゃんのような稚拙な表現ひとつとっても、本当に何も考えていない人間が発した言葉なのか、凄く考えた上でそれ故に上手く表現できなかった言葉なのか。(彼の場合は後者である)あるいは赤シャツのように饒舌に物事を語っているが、それはどこまで誠意がこめられた言葉なのか。私たちはすぐにわかりやすい情報だけで物事を判断してしまう。メディアの断片的な情報だけである人物のイメージを作り上げてしまうように。コミュニケーションや言葉は確かに大切なものであるが、人間と関わるということはそういった表面的なものだけで判断してしまうのではなく、その人物を知り、察するという日本人の感性も本質的なものを見抜くためには必要ではなからうか。これは確かにうすぼんやりした非論理的なものかもしれない。しかし、表面的な情報だけで物事を判断してしまうことのほうがよっぽど恐ろしいことだと思ふのだ。

ここでは、我々が「簡単で分かりやすいことを好む習性」の故に、「断片的な情報」や「表面的な情報だけで物事を判断してしま」う事が危惧されているが、これは確かに授業で目下提起されている問題であるだけに、多くの学生の関心を集めることになる。

また、この時間には、もう一つのポイントとして、うらなりの意味に言及した。彼は、山嵐、坊っちゃんと赤シャツ、野だいこの両陣営のいずれにも与せず、終始沈黙がちな人物であり、赤シャツに敢然と戦いを挑む山嵐とは非常に異質なものを感じさせる。私は、それに着目することで、『坊っちゃん』の善悪の問題に、新しい光を当てることができないかと考えたのである。私が話したのは、ほぼ次のような内容であった。

赤シャツや山嵐、坊っちゃんは、いずれも自己の正しさを主張し、それを貫こうとする。そのこと自体は極めて正当であるにしても、そのために、相手の裏をかいてその非を暴くことは、やはり人間の行動として問題ではないだろうか。例えば、山嵐や坊っちゃんは、赤シャツの非を暴くために升屋に身を潜めて彼の行動を監視する。これは、自己の正しさを主張するためには、むしろ普通の行動であるという見方もあろう。しかしそれを、うらなりのありようと対比してみれば、やはりそこに問

題を感じざるを得ないのではないか^{注4}。

うらなりは誰に対しても信頼と礼儀正しさを失わず、自己正当化や自己弁護はおろか自己主張も一切もしいまま、赤シャツさえ信じて、全てを受け入れる。彼は確かに社会的に無能者なのだが、確かに山嵐や坊っちゃんを超えた無垢で純粹な存在なのである。

だが、なぜ彼だけがそのような無垢な存在たり得たのか。それは、彼が沈黙を守る人間であったことと深くかわつていよう。なぜなら、人間が互いに対立し、その中で自己弁護や自己正当化に走るのには、人が言葉によって世界を生み出し、言葉の意味を通じて生きる存在であることと切り離せないからである。だが、その人間が言葉を用いないという事は、いわば人間世界の外に身を置くということでもある。そのような意味において、うらなりは、現実的存在としての人間とは、次元を異にする存在であるともいえる^{注5}。

このように考えてくると、坊っちゃんが赤シャツに増給を断わる場面に、きわめて暗示的な記述があることに思い当たる。そこで、坊っちゃんは増給を断わる理由を赤シャツに説明しようとするが、赤シャツによつて簡単に論破されてしまう。言葉の運用において、坊っちゃんは所詮赤シャツの敵ではないのである。だが、坊っちゃん

きこと、さらに、うらなりの意味に触れつつ言葉と人間の関わりについて述べたのであった。

三 自分はどう生きればよいのかという問いかけ

— 11 / 5 の授業

この日の授業プリントでは、多くの学生が前回のプリントに載った11「表面的な情報だけで物事を判断する恐ろしさ」に注目していた。その例を二つ引く。

12 復習メールを出した方が書かれた、「人間は分か

んは、それにかまわず、「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになったんですから、まあ断わります。考えたって同じ事です。さようなら」と云いすて門を出る。ここで注目すべきは、その直後に「頭の上には天の川が一筋かかっている」という一文がつけ加えられることである。この「天の川」は、門を出る坊っちゃんを黙って照らすことで、その正しさを証しているのではないか。だとすれば、ここでは、正義の所在は人間の言葉によつてではなく、天の川の沈黙の光によつて示されていることになる。つまり、『坊っちゃん』は、正義の所在（あるいは善悪の区別）を明らかにしようとする人間を描きつつ、それは実は人間の言葉の届かぬ沈黙によつて示されるという構図を持っているわけで、沈黙する君子としてのうらなりの意味も、そのことに関連している（注6）。すなわち、うらなりの沈黙は、作中で対立し、交錯するさまざまな登場人物の言葉を全体として位置づけ梓付ける座標軸のような役割、例えてみれば絵画における消失点の機能を果たしているのではないか。

この日の授業では、善悪の区別をつけることの困難さを前提として認めよう（8〜10に共通）、我々はそれにどう対応すべきかが問題であること、そのためには11「表面的な情報だけで物事を判断する」事を戒めるべ

りやすい事を好む習性がある」という意見にもろ手を上げて賛成したいと思います。僕の母や祖母がその典型的な例で、とにかくニュース番組で取り上げられた事件や日常でおきたできごとを、良いか悪いかだけで判断しようとしています。二人とも竹を割ったような性格だからか、曖昧な結論に持つていくことを極端に嫌い、話していくときの表情に如実に現われるときもしばしばあります。だから、難しいというか、話し合っても答えが永久に出ないような国際間の国家問題や倫理的な問題が話題に出ることはほとんどありません。こういう二人の姿勢のように、答えの曖昧な問題を見て見ぬふりをする人が多いよ

うな気がします。かくいう僕だって、友だちに尋ねられた問題に明確に答えられないときはお茶を濁します。でも、永久に放置しておくわけには行きません。知の枠組みを揺らされるのを恐れていては、問題の解決の糸口は得られないと思います。

13 「表面的な情報だけで物事を判断する恐ろしさ」を読んで、知らず知らずのうちに、私も分かりやすく単純な方へと逃げていることに気づき、ハッとしました。「分らない」を大切にしたいと言っておきながら、無意識のうちに結論をすぐ求めたがる自分がいました。「分らない」を大事にすることに同意するのは簡単だけど、実行に移すのはすぐく根気、やる気、努力、好奇心が必要だと思いました。

これらはいずれも、自分自身の内に「表面的な情報だけで物事を判断する」傾向を発見し、それを克服すべき課題と捉える意見である。教室全体として、日常的具体的な体験と結びつけて自分の言葉のありように目を向ける意見が増えていると感じられるのである。

また、他方で、多くの学生がうらなりに関心を寄せていた。彼に対して共感するものも多く、その「徹底的な謙虚さと公平さには心打たれる」等の意見が多数を占めるのだが、ここでも多くの者が、自分自身のありように

関心を向けているように感じられた。

14 何となく挫折しながら読んだ『坊っちゃん』でしたが、先生の解釈により、その埋もれかけた断片が生き生きと立ち上がってきました。(略)そしてただ面白いだけでなく、人間にとってほんとうに大切なものとは？ と問いかけているのも、後々引つかかると思います。A↓B↓C：の三段論法で終わってしまいがちなところを、分らないままではアカン、と思わせてくれるような作品だと受け取りました。

15 私にとつて赤シャツはやはり悪人です。こんな人が許され、認められる社会であつて欲しくないと強く思います。しかし、バツタ事件の深層が分からないこと、赤シャツ、うらなり、マドンナの具体的なやりとりが描かれていないことなど、作品の中には不明な点がたくさんあります。真実は分からないということと、赤シャツへの感覚的嫌悪を如何に統合するかを考える必要があるのだと思いました。

16 先生の『坊っちゃん』解説を聞き、なるほどなあと思いました。本当の正しさが分からないことと感覚的な嫌悪を抱え、どのように生きればよいのでしょうか？ 私は自分自身への絶対的な自信を持つ

ている人、自己主張が妙に強い人に対して、憧れと同時に恐怖に近い感情を持っています。私自身はつきりと意見を主張できるタイプでないため、攻め立てられると言葉が出てこなくなりませう。何か違うと思っても、上手く伝えることができません。言われているうちに、もしかしたら相手のほうが正しいのかもしれないと、だんだん飲み込まれてしまいます。相手が正しいのか、自分が正しいのか、なんだか分からなくなりませう。そんな現実の中で、本当に大切なもの、正しいものを見つけれられるのか、不安になります。

これらは、『坊っちゃん』の提起する問題を自分自身の生き方における課題として受け止めようとしているのだが、それだけにまた、どうすれば良いのか分からないという戸惑いが伝わってくるのである。

彼らの戸惑いは、また、うらなりの存在をどう受け止めれば良いかという点にも向けられていた。

17 確かにうらなりや清は疑う余地のない素晴らしい人物なのかもしれない。坊っちゃんはストリートで美質があるのかもしれない。しかし、そこまで美しい人間がどれほどいるのかと疑問に思うし、それをどれだけ自分が見抜けるかも分からない。私は『坊っ

ちゃん』のように自分の価値判断に自信を持つことができないう点で、もう一度この漱石の見解については自分なりに考えてみなければならぬと思っている。

18 人間にとつてほんとうに大切なものを、うらなりと清は持っていることが分かった。普通の人なら人に与えてばかりの愛は苦しくなるし、自分も愛されたいと思うけど、清にはそれが無い。でもこういったすばらしい人は世の中にはほとんどいないし、世の中の常識から見れば、理解しがたい。社会という枠組みの中では、本当に生きづらと思う。だから私は、世の中の常識というものをそのまま受け入れるのではなく、人間としてほんとうに大切なものを持つている少数の人に対する理解と、常識に立ち向かう勇氣が必要なのだと思う。

これらの学生は、清やうらなりのような人間は現実にはいないと言ひ、その生き方を自分の生き方の手本にするのは非現実的であると感じている。確かに、小説は道徳教材ではないから、登場人物の中に読者が見習うべき模範を求めする必要はない。だがそれでは、読者が、小説を通して自分の生き方を見直そうとする時、そこではどういう態度が求められるのが問題であろう。

また、中にはうらなりの消極的なありように納得できず、「うらなりは『弱い』から、赤シャツに何をされても黙っているだけなのではないか」、「沈黙の世界に逃げたいてしまつと、『本当に正しいこと』を無視することになり、人間として生きることを放棄しているように思える」という意見もある。これらは、うらなりを現実的な人間として理解し、直接的な模範を彼に求める考え方であろう。

この時点で、授業をどんな方向に展開するか、明確な展望があつたわけではないが、ここで私は、うらなりについて次のように話したのであつた。

うらなりは、一見したところ歴史的社会的現実を生きるリアルな存在とも見えるが、実はそうではない。小説の登場人物をリアルに描こうとすれば、歴史的社会的な規定性の下での典型的存在として造形することになるが、小説の人物がすべてそのように造形されるわけではなく、歴史的社会的規定性を離れたある人間の本質を象徴的に示す場合がある。うらなりは後者の例と考えるべきで、言葉を持たないことを通して歴史的社会的な規定性を脱した、いわば象徴的存在として描かれた人物であるといえる。彼は、そのように造形されることで、さまざまな人物を相対化し、照らし出す「原点」、「視座」と

なり得たのである。また、読者にとつて、彼は実際の生き方の手本になるのではなく、むしろ、彼を通じて読者自身の姿が照らしだされるというのもこれに関わるだろう。例えば、我々は利害の対立する場において、ともすれば自己弁護、自己正当化のために言葉を用い、しかも、自らはそれを「正しい言葉」と意識しがちである。うらなりは、そういうことを我々に改めて意識させる存在なのである。

四 絶対的正しいさの基準と人間の言動

— 11 / 12 の授業

『坊っちゃん』を扱う最後の授業である。この日の授業プリントを見ると、やはり学生の関心はうらなりに集中しており、前時の話を受けて自分自身と言語とのかわりについて述べた文章がいくつもあつた。例えば次のようなものである。

19 正しいことを言おうにも、自分では正しいことと思つていいことでも、その人の状況や立場によつてはそれが正しくないこともあり、それがわからないのだということに改めて気づいて、すぐくすつきりとした気持ちになつた。やつてゐる側としては正し

いことでも、それをされている側としては正しくないということも世の中にたくさんあることが良くわかった。

20 「正しいことをいう」の「正しいこと」というのは、状況や誰が言ったかによって変わるといいうのはっとした。自分も、自分にとって不利な場合や、立場に立たされた時、自分がやっていることが正しいと皆に説明します。でもそれは、自分の行いを正当化するためだけのものであって、悪く言えば言い訳なんだと思いました。また、状況が変われば、言っていたことと反対のことも言い出しかねないと思います。つまり、それは「正しい」という言葉を使っ

て自分を守っていることになると思います。本当は何が正しいかさえわからないはずなのに、分かっているふりをして自分の良い方へもつていこうとする。そこに、人間の汚さを感じました。

人間が、言葉で「自分の正しさ」を主張するとき、と

もすれば自己弁護や自己正当化を正しい主張と感じてしまう。これは、正しさの絶対的基準がない所でいかに正しく振舞えるかを、言葉の問題として考えようとするものといえる。

これを、改めてうらなりとからめようとする者もいた。

21

以前は『坊っちゃん』の世界を完全に現実世界にあてはめて読んでいたので、うらなりが「他の登場人物を映し出す役割」であるとか、「消失点」だとか言われてもピンと来なかったのですが、『坊っちゃん』はあくまで小説であり、小説の中だから沈黙の君子うらなりが存在でき、価値を持つのだと知りました。私は早合点して、うらなりが世界の中心の役割を持ち、坊っちゃんや山嵐や赤シャツと比べて、「沈黙」だから偉いのだ、正解なのだと考えていました。しかし、問題は、うらなりによって登場人物の位置と相互関係を明らかに示された中で、何が正しいか分からないという恐ろしさをどこまで自分の実感として受け止められるかにあるのでしょうか。何が正しいかわからないとだけ叫んでもいても仕方がないが、では次に自分なら途中でどう生きるかという課題をうらなり（天の川）は与えてくれているのだと思いました。そして、うらなりのように偉く生きよう！だけでは実際問題としてダメなのではないか、難しいのではないかと思うのです。

22

私は赤シャツが嫌いです。しかし、現実世界の中で、私も赤シャツのようになるかもしれません。正しいことは分からないという事実のまま立ち止

まっつていては、この分からなさを利用する立場に知らず知らずのうちに立ってしまいかもしれません。自分のなかにうらなりを抱き続け、具体的状況の中へ悩める人間になりたいです。

これらの文章では、天の川は、何が正しいのか容易に分からない状況にいる人間にとつて一つの力になるだろうと考えられている。確かにそのとおりだが、ここで大切なのは、天の川が人に具体的な生き方を指示したり、命令したりしないことだろう。天の川は、直接的命令という形ではなく、その存在自体を通じて、人間に「どう生きるかという課題」を与え続ける(21)のであり、「自分のなかにうらなりを抱き続け、具体的状況の中で悩むことを要請する(22)のである。以上が、授業で話したことであったが、現時点では、これはもつと具体的に説明する余地があったと感じる。それは例えば、次のような理解である。

もし天の川の「正しさ」を直接的に実体化してしまえば、その時、天の川は沈黙の光にとどまることをやめ、絶対的権威として人間に「正しい行動」を命令し始めるであろう。その命令に対して、人間は自ら考え、判断する主体であることをやめ、ただ客体としてそれに従うだけの存在となる他ない。もしそういうことであるなら、

「善悪の基準を知る」とは、人間から主体性を剥奪することにならざるを得ないのだろうか。そうではあるまい。人間が正しく行動できるとは、善悪の基準がない状況においてなお、状況に照らして自ら判断を下し、行動を誤らないということだからである。その判断は暫定的なものにならざるを得ないし、果たしてそれが正しい判断であったかどうかは、その時点では分からず、事後的に検証するほかない。おそらく、「正しく生きよう」とする人間にできるのはそういうことではないのだろうか。

これは、一見極めて微温的で常識的な考え方にも見えるが、必ずしもそうではあるまい。善悪の問題は人間にとつて極めて難しい課題で、人はともすれば、不可知論から場当たりのな行動に走ったり、あるいは単に自分の利益を重視しながら、自らはそれを「正しい態度」と意識することも少なくない。あるいはまた、恣意的な正義を絶対化して、それを強権的に相手に(あるいは社会全体に)強要することもある。それをどのように回避するかが課題であり、ここで求められるのは、絶対的基準がないところで、自らの責任で状況を見定め、たとえ暫定的にはあっても、主体的な判断を下す意思を失わないことである。ここでは、むしろ善悪の基準がないからこそ、人間はそのような主体的志向性を維持し得るのでは

ないか。そして、天の川とは、そういう形で人間の判断と行動を支え、促すものの象徴なのではあるまいか。

さて、『坊っちゃん』の授業自体は先に述べたような形で終わったのだが、その中で提起された問題は、この後の授業の中で、さまざまな形で繰り返し学生の文章に現れた。その一例として、一二月二四日の授業プリントに載った、姜尚中『ニッポン・サバイバル』についての文章から引用する。

23 安易な「分かつている」の恐ろしさ

『坊っちゃん』を扱った際に、村上先生の「この物語は何が正しいのかわからないところにミソがある」という解説にはまさに目からウロコだったのを思い出した。確かに、描かれている正義や真意は霧がかかるといって曖昧だ。そして、先生は続けてこう締めくくった。「それをあなたはどうか考えるか」と。それから、授業が進み、漱石のロンドン留学時代を学習しているとき、また新たな課題が現れた。それは「分かつていることって、本当に分かつてるか」という強烈な問いであった。これは私にふっと『坊っちゃん』の「何が正しいのか分かつてるか」という問いを思い起こさせた。けれどもそのときは、なんとなく分かるような気もしたが、特に自問自答す

ることもないままであった。しかし、このように問いを重ねた経験は、今回『ニッポン・サバイバル』を読むことで、後に自分の中で随分と大きな意味を持つようになったのである。(略)

「社会や世界」を「知る」ことが現在進行形で行われ、それに心を痛めたり悩んだり考えたりすることで、その時点で「分かつている」ことがある。それは確かに「分かつている」ことであるし、それが無闇に否定されたり、批判されることはないと思う。けれども、「分かつている」ということは暫定的でなくてはならない。なぜなら、学べば学ぶ都度「知る」中身は変化するし、何より私たちは年を重ねる。学びと経験も層を重ねるように厚みを増し、感じ方も変わるだろう。そのことを十分踏まえた上で、私は「分かつている」を何度も積み重ね成長し、姜尚中の言う「しなやかに、したたかに、ともに生きて」いきたいものだと思うのである。

おわりに

以上で平成21年度後期「漱石の思想Ⅱ」での『坊っちゃん』読解の経緯を追跡したが、この授業で目指した

のは、予定した結論に向かつてまっすぐ進む教師主導の授業ではなく、学生の意見によって展開する対話型の授業であった。もつとも、それは口頭による直接的な対話ではなく、授業プリントに掲載された「発言」を通しての「対話」であったが、とにかくそれは以上のような形で展開したのであった。その経緯を整理すればおよそ次のようになろう。

最初の論点は、『坊っちゃん』において善人悪人の区別がつけられるかどうかであったが、作品を検討するとその区別を証明するのは容易でないことが認められた。しかしそこで、不可知論に陥ることなく、状況に対処するには、どうあるべきか。この課題に直面する中で11「表面的な情報だけで物事を判断する恐ろしさ」が提起され、改めて自分自身が情報とどのようにかかわっているのかを見直そうとする方向に授業は展開した。また他方で、うらなりの沈黙の意味が天の川とともに問題になり、人間の「正しさ」について考えるには言葉の問題が避けて通れないという理解も共有された。そしてまた、人間が把握し得る「正しさ」とは、絶対的永続的なものではなく、一時的暫定的なものであるほかないし、むしろそのような「正しさ」を志向するところにこそ、人間の主体性が発現するのであり、「天の川」とは、人間のそのよ

うな志向を支え、励ますものの隠喩ではないかというのが、一連の授業の到達点となった。

以上のような授業の経過は、本論執筆のために授業プリントを読み直し、そこに掲載された多くの学生の文章を再検討した結果得られたものであつて、授業を実際に行っている時点では、討論がどこに向かつているのか十分には分からないまま、手探り状態で授業していたというのが実情である。むろん、できるだけ問題をクリヤーに提起し、学生に投げ返そうと努力はしたが、果たして学生の意見を正しく整理できているのか、議論の道筋を正しく示せているかどうかという見通しは十分でなかつた。

だが、それにもかかわらず、学生達は終始積極的に自分の考えを出席票に書き、メールで送信し続けてくれたし、その意見の多くは自分自身の生き方を真剣に見つめ、振り返ろうとする姿勢を示していた。それは、単に学生達が真面目であつたからというだけでなく、共に問題に向かう者の連帯意識に支えられていたからではないかと感じる。そして、そういう雰囲気教室に生まれた要因としては、やはり授業プリントを通じて個人個人の意見を教室全体に紹介するという「討論」が一定の効果を發揮したということであろう。

授業の経緯をみても、自分自身を反省的に振り返る姿勢はかなり早い段階から現れ、それは学生達の強い共感を得ていた。例えば、10月22日の、6「私はどこか後ろめたさに苛まれつつ生きている」や、7「言葉によっては伝えられないものを感じる」には熱のこもった共感が寄せられた。例えば10月29日のフリー・トーク欄(注7)には、「非常に非常に感動しました。すごく共感しましたし、何より、私が私自身を振り返るきっかけになりました。こういう文章好きだなあ……と、心底思います」というコメントが載ったし、その他にも同様の反応は少なくなかったのである。その中の一つが、10月29日の11「表面的な情報だけで物事を判断する恐ろしさ」であり、さらにこれに触発されて、その後多くの文章が書かれた(11月5日の12、13や、11月12日の19、20等)のは、本論で見たとおりである。

教師自身に結論が十分に見えていなかったにもかかわらず、授業プリントは学生の間に新たな関心や問題意識を呼び起こして、次の論点を自然に形成していく機能を果たした。学生達は一人で試行錯誤するのではなく、教室の皆とともにあることに支えと励ましを見出していたと感じる。このような「対話」は、共通教育科目のあり方として一つの有効な方法なのではないだろうか。

(注1) この授業では、レポートや毎時間の出席票からいくつかの文章を選んでプリントに載せ、次の授業ではそのプリントを用いて前時の復習をおこなった。それによって、学生たちは自分の意見が教室全体の中でどんな位置にあるかを知り、それを踏まえてまた自分の意見を出席票に書く。このような形で学生に「発言」させ、「対話」を行うのが、授業の基本的なスタイルであった。

(注2) 小森陽一氏に「山嵐と『おれ』が辞職におい込まれる(略)理由になったのが、まさにこの噂話のレベルの言語を、あたかも(公)の価値基準のようにふいちようする新聞の記事であったことは象徴的である」「日本文学」1983・3〜4」という指摘がある。

(注3) この授業では、学生の書く機会を増やすために、授業中の出席票だけでなく、授業後に改めて考えたことを「復習メール」として文章化し、送信することを推奨した。

(注4) 相原和邦氏に「探偵行為をあれほど嫌って非難していた坊ちゃん(略) 結束では、いかに天誅のためとはいえ、山嵐とともに、紛れもない探偵行為をするようになる」(『漱石文学の研究―表現を軸として』明治書院1988・2) という指摘がある。

(注5) 小森陽一氏に「言葉を発せず、決して自分のことなど語ろうとしない、うらなり君の位置(延岡―沈黙する世

界」は、赤シャツ等の世界（四国―裏表のある世界）はもとより、山嵐（会津・東京―表としての〈公〉的言語世界）や語り手（東京―裏の〈私〉的言語世界）をも相対化している」（注2に同じ）という指摘がある。

（注6） 論証抜きで言うのだが、うらなりの沈黙は、『マコころ』の先生が妻「静」の「純白」に抱く憧れにまで連なっていくのではないだろうか。それは、沈黙を通じて言葉にアプローチしようとする志向である。これは、漱石文学における禪の役割をどう理解するにもかかわる、興味深い問題であると感じる。

（注7） 授業プリントでは、授業内容に直接関わるコメントだけでなく、より日常的、身辺雑記的な感想や体験を記した文章のために「フリー・トーク」欄を設けた。これは、文章を書く学生の気持ちを解放し、彼らが日常の自分のありのままを表現できるようになるのに役立つと感じる。

*付記 本稿は、日本文学協会第30回研究発表大会（2010・6・26フェリス女学院大学）での口頭発表原稿をもとにして、それに大幅な改稿を施したものである。

